黒き魂と白き魂、赤き魂と灰色の魂　混ざれ、混ざれ、混ざれ、混ざりゆくは汝

トーマス・ミドルトン「魔女」より

【形影相伴う胤とミドラーシュ】

「天龍ちゃん、元気かしら？　元気って聞いたのだけど？　答えて？」
「ッ……はい、元気だよぉ♪　ふふ、んふふ」
「はぁい、よろしいですよぉ♪　今日も漬け漬けしようねぇ」
「うん、うん、龍田と漬け漬けしてエッチなことするする♪」

龍田が艦娘になる前、最後に見た物は何だ？　と提督は遠征前に質問した。紫のスカートを翻し、彼女は答えた。
「確か……蜘蛛の巣に絡まるホタルガでしたねぇ……。提督はホタルガをご存知？」
黒い翅を持ち、先端には蛍の光のような白い線がある蛾でヒラヒラ、ピラピラと人を撫でまわすように飛ぶと説明した。
説明を終えると彼女は遠征の準備が、と言い下がった。提督の心底には虫に対する嫌悪感と龍田に対する蟠りが生み出された。
毎回遠征に行く駆逐艦以上の艦は馬鹿にされる。それは提督の耳にも入っている噂だった。

天龍と龍田、二人はいつも遠征に行かせている。可哀想だと思っているが改善させることは資材などの問題で出来ない。
彼女ら二人はいつも二人でいる。
遠征以外での彼女らは……。

艦娘に用意された部屋で二人は愛し合う。
「天龍ちゃん、バケツのアレ美味しい？」
「うん、美味しい♪　龍田ありがと♪　あのね……そのね……俺のマンコの方も濡れてきちゃってね♪　その、うんと……ね、指で前みたいにイジめてほしいなッ♪」
「いいよぉ♪　お股を開いてからエッチな、艦娘おマンコ前に突き出してみせてぇ♪」
服は乱れ、滴る蜜は溢れる。艦娘用に付けられる頭部の装備や眼帯は外されていた。
誰からも愛されず、艦娘になっても笑われ続けた二人は狂っていた。提督の前で見せる顔など仮面に過ぎない。
天龍は愛を求め、高速修復材と龍田の愛撫に快楽を得ることができた。

龍田は支える人間を求め、天龍に依存した。
快楽のカーテンが幕を開ける。

全裸の天龍と龍田は布団の上で重なり合う。
唇は重なり、キスをする。手は身体を撫で、乳房を触り、秘部を弄る。足は絡み合い、二人は悦楽の連鎖を感じる。
龍田は天龍と眼を合わせながらキスをする。眼を開きながらの口づけが気持ちいい。それを彼女は知っている。
「んっちゅ……天龍ちゃん……舌先でレロレロしたいぃ？」
「したい♪　龍田レロ～って♪　舌同士でキスぅ」
舌先で愛撫。舌同士が絡みつくことなく、愛撫を行う。その行為をしている時も彼女たちは見つめ合っていた。脳が幸福を感じて快感物質を脳全体に流れ出す。艦娘の脳は特殊であった。彼女たちも同じである。戦いに集中するようにセックスに集中する。キスは形を変え、口内に舌を挿入し舐めまわす。唇に甘噛みを交互に繰り返。舌を吸う、リズミカルに舌の挿入をこすり合わせる。バリエーション豊富に、龍田に性を求めるように天龍はキスを変化させる。
「んじゅ～ぅ、ぴゅっちゅ～～んぅ、天龍ちゃん、キス上手だねぇ」
首に垂れる汗を舐めとる。甘酸っぱく感じる。フェロモンが鼻を支配する。首下からゆっくりと乳首まで辿り着く。天龍の大きめの乳房に舌を這わせ、丁寧に舐める。
「はぁん、いいよぉ♪　天龍の女乳首ぃいじめてぇ♪」
ボリュームのある乳房が唾液まみれになり、龍田の舌の動きによって形を変えていく。舌が離れると元に戻り、弾力性を見せる。
「はぅぅ♪」
乳首に舌先が当たる。はしたなく身体を震わせ、乳房を揺らす。天龍の敏感な部分である乳首は、いやらしく尖りだす。舌でこねくり回す龍田はときどき、乳首を甘噛みし、舐め上げた後に、吸う。チュウ、チュウと音が天龍を打ち震わせる。
「こんなに乱れるぐらい、感じちゃっているんだぁ……。かわいいっ」
「ふぁぁあ……胸感じておかしくなるぅ♪」
胸をじっくりと弄り続ける。左右を交互にしゃぶり、手で乳首をしごく。どんどん固くなるピンクの突起は美しかった。
「どうするぅ……本番しちゃう？」

龍田は天龍に問いかける。恥ずかしさに襲われた天龍は顔を真っ赤にしながらバックから犯してほしいと壁に手をおき、尻を龍田に見せた。
ワレメは既に濡れかけており、愛液が溢れ犯してほしいということがわかる状態であった。
「ペニパン……付けるねぇ」
龍田はペニスバンドの内部のディルドをゆっくりと押し入れる。甘い声が漏れる。
「……ぁ、はぁ……ふあぁッ」
腰を動かし、バンドを股にかけて留め金をかける。
「ふーっ、っさ、今犯してあげるからね」
眼がしっとりと濡み、セックスに対する興奮のみとなった彼女たちは獣の交尾のように前と後ろに重なり合う。
「装着したから……今すぐ犯すからッ犯しちゃうからね」
「ッフー♪　フぅ～～♪　へぇっへ……はやくぅ♪」
犬のように舌を出し、誘う。女性に無い異形の形をしたペニスバンドは龍田に似合っていた。バックから犯す姿勢になると、濡れた膣内にディルドの部分を挿入していく。ワレメが大きく開き、蜜を溢れさせながら呑みこんでいく。
「はっいたぁ♪　あっぅっくぅぅ～～♪　大きいいいいいい♪　龍田のチンポ美味しくいただいちゃった♪　こんなの誰にも見せられないぃ♪」
長い嬌声を漏らして腰をくねくねと動かす。咥えた腰の肉棒を膣で愛撫する。ぐいぐいと龍田は自分のペニスのように動かす。
「虜になるぐらい犯してあげるっ♪　ねぇ～天龍ちゃんはド変態レズチンポが大好物だもんねぇ～」
狂ってしまいそうな快感がお互いの身体に浸透していく。同性という背徳的な部分も混ざり、挿入したディルドが激しく動く。龍田の激しい突きは天龍の全身を蹂躙していく。
「ひぐぅ～～♪　ひっぐぅ♪　おかしくなっちゃう♪　これもうっ♪　ダメっ♪　おぉっほ♪」
秘部からは蜜が垂れ流され床に落ちていく。膣が圧迫されディルドは何度も抉る。龍田は腰を動かすと自分の膣内に入ったディルドも動くことで快感を得ることが出来た。目の前で愛する人がよだれを垂らしながら自分の分身に突かれる姿も興奮の要因の一つであった。

ああ、幸福。もうこの濫みにハマり続け、疲れないぐらいに天龍を貫き続ければ何もかも報われる。
龍田はそんな風に思ってしまった。よがり続ける天龍はディルドの魅力に堕落し、嬌声をあげる。
自らの腰を動かしながら、ディルドのゴツゴツした表面を膣で味わい、体を震わせる。胸のバストは動くことに揺れる。龍田の手が腰から胸に変わり、揉み、敏感な乳首を抓る。
「ふっしゅぅ♪　あっ、これ気持ちいい♪　だめ♪」

「あああぁあ♪　あぐぅんっ♪　達しちゃう♪　我慢できないっ♪　あーーー♪　感じちゃってッ♪　あ〜〜♪　イクぅ、イッちゃうぅぅ〜〜ッ♪」
彼女は快楽の沼に浸かりきるように、龍田の腰使いに任せて絶頂した。子宮にノックするように刺激を与えると蜜壺は凝縮し、大きな声をあげてのけぞった。絶頂を数回細かく迎えて、天龍はプルプルと痙攣させて、愉悦を楽しみながら床に倒れこむ。
龍田は天龍が絶頂するのを見届けるとペニスバンドを外す。それで自分を犯し、慰めることなどしない。

龍田は思う。終わってしまったか。私はまだ絶頂していない、なんと空っぽな愛だ。ちっぽけな愛だ。
天龍は満足な顔を浮かべ、よだれを垂らし、愛を貪っていた。
その顔を横目で見て、本当の愛が何かと探し求める。醜くも愛おしい、それは表裏一体の感情であった。
探し求める者、ミドラーシュは胤を残す者を求める。

了

【フタナリ那智さんのチンポ負けとは関係ないスケベなお話】

「私は那智だ。フタナリ妙高型の二番艦だ。フタナリが悪い世の中ではなくてよかったな。む、提督お疲れ様だ。今日はフタナリ記念日か……提督、頼むぞ！」

フタナリ記念日とは、フタナリ艦娘が毎月第二日曜日に行われるお下品な記念日である。フタナリの艦娘は提督の尻を犯してもよい日だった。

フタナリ艦の那智は、今日の日を楽しみに待っていた。この鎮守府ではフタナリは那智しかおらず、提督の鍛え上げられた尻マンコを独り占めできるのであった。

ムスーっとした那智は布団で提督のことを待っていた。廊下で話しかけたときは分かったとしか言っていない提督に腹を立てていたのだ。

「提督、遅いではないか。待ちくたびれたぞ！　ほら、服を脱いでこっちに寄れ」

二人は向き合うと服を脱いだ。提督の白い肌に那智は目を奪われながらも自分の服を脱いでいく。女性用の黒いショーツに押し込まれたペニスを露出させる。

「提督の為にしっかり綺麗にしてきたから大丈夫だぞ……」

ゆっくりと体に指を這わせる。那智は提督の男らしい身体に胸をドキドキさせる。今からこの男を犯すのだ。それを胸に秘めて、愛撫を誘わせる。

布団の上に二人は交わる。フェロモンは乱れるように淫乱へと変化していく。キスが何度も行われ、手はお互いの肌をいやらしく触れ合わせる。うなじからする甘い香りに那智は、よりいっそう興奮した。濃い媚薬のフェロモンを嗅ぎながらキスをせがむ。キスをすると那智の舌が提督の唇を舐める。

「んちゅッ♥　ん゛ぅ～激しくてすまない♥　溜まっていてな……♥　ほぉらぁ……今日は全裸だから見るだけで分かるだろう……」

そこには上からゼリーのように左右に揺れる乳房、きゅっと締まった女らしさがあるウエスト、そしてフタナリ特有の漲った肉棒があった。熱の塊のようにドクンと張りつめていた。

「私の亀頭……ぬれぬっれだな♥　金タマがこんなにプリっぷりなのだから溜まっているのもわかるだろう♥　こんな全

裸でするのは久しぶりだから恥ずかしいのだ♥」
那智は提督と向き合うとスッと提督の陰茎に手を当てる。亀頭が上を向き、勃起していた。
「お前のも十分固くなっているな……私のも触れていいんだぞ♥」
提督の頭は、ぎゅむっと那智の胸に押し込んだ。
「そうか、提督はチンポを触りながらおっぱいぐにぐにがいいのか♥　変態さんだなぁ♥」
乳房をぐにぐにと埋める。時折、乳首と乳輪を舌で舐める。豊満な乳房は唾液に乱れ、那智のペニスを触っていない手で片方の乳房を鷲掴みする。むにむちと揉みしごかれ、フタナリ乳房は、形をパンの生地のように変えていく。
「あんぅ～♥　そのぉ～♥　あぁっ♥　変態おっぱいぐにぐにと赤ちゃんチュッチュしゅご♥　提督のチンポしごくからぁな♥　お返しセンズリぃだぞぉッ♥」
那智の胸では、ぬっち、ぬっちと胸の唾液が擦れ淫音が、下半身ではお互いのペニスをシコシコと扱く音が響く。
那智が皮シコすると提督がビクンと跳ねる。那智の弱いところであるカリ首を提督が触れると甘い吐息を吐いてしまう。
「んぅっ……一回……出しておこうか♥　そうすればケツのゆるみがよくなるだろう♥」
那智は、手のシゴきをはやくさせる。何度も上下する包茎がニチニチと音をたて、いやらしく耳に響く。抵抗するように提督の愛撫も大きくなる。荒く手コキを続けると女性のように反応する提督を見て那智は耳元でささやき始める。
「さぁ、射精しろぉ♥　ぷりっぷりの精液を私の手や体に出して女の子になろう♥」
誘惑の囁きが提督を限界に向かわせる。
「く……ッッ！」

びゅっるるっる！　どびゅジュッジュるるるる！　どびゅりぇ！

勢いよく煮えたぎった欲望が噴き出す。濁流のように吹き出し、手を汚す。
マーキングするように射精した精液はべっとりとスベスベした手を濡らした。唾液の匂いとザーメンの匂いが混ざり、官能的な匂いをさせ、那智のペニスをさらに硬化させる。

「あっつい精液、私の手に受け止めたぞぉ♥　これで女の子だぁ♥　いいんだぞ♥　ちゅっちゅっておっぱい吸いながら手でイっちゃういけない提督はフタナリ艦専用メス便器なんだ♥　さ、おねだりの姿勢になってくれ♥」

提督の姿勢を見て那智は笑う。膝を立て、股を開き、トロトロな視線で那智を見ている。

「ふふ、こんな駄目な恰好でもう挿入してほしくてたまらないみたいだな♥　今挿入してやるぞぉ♥」

ローションを手にし、チンポにかける。ソースのようにたらりと垂らすと先端部はテカテカと光る。

「ゆっくり……♥　ゆっくり入れるぞぉ♥　ふー♥　ふぅ～♥　ん、入ったぞぉ♥　おぉ～♥　これはすごくしっくりしたアナルだぁ♥　こんなに開発してぇ♥　これはすごいぞ♥　ガンボリするのが楽しみだなぁ♥」

ゆっくりと撫でるように丁寧に腰を動かす那智、提督はその動きに合わせるように快楽を得ていく。

「ちょっとずつ激しくしてくぞぉ♥　おほぉふぅ♥」

正常位での挿入が少しずつ慣れると動きが高ぶり始める。

那智は吠えるように、チンポから伝わるアナルの感触を提督に投げかける。

「提督の尻マン♥　愛用のオ、オナホみたいに吸い付いてくるぞ♥　すごい精力アナルゥオホッ♥　オホォン♥　こ、これ最高ぅ♥　くひぃ♥　ぉ ッヒぃ～♥　感じるぅ♥　チンポの中まで温かく感じる～ぅ♥　んんぁぅあ♥」

肛門の刺激が高まるとビクンと痙攣させる。痙攣の振動がチンポへの快感になると那智は刺激的に腰を振るのだ。

「あアん♥　アギッ♥　これこれ、これ、癖になる♥　ブルってお尻の中が動くとこっちも感じるぅ♥　狂ってしまいそうな、アナル中毒ぅ♥」

尻圧が大きくなると、甘い摩擦がクニクニとチンポを責め立てる。那智のチンポでこねまわされたアナルは、奥まで侵入を許す。それを狙ったように那智の腰は絡みつくように奥に押し付ける。

「これは感激だ♥　アクメ感激♥　あ～～ぁはぁ♥　そこが弱いんだなぁ♥　もっと奥もいいのか♥　痛くしたらすまない♥」

アナルの奥を撫でまわすようにチンポで刺激する。亀頭

カクカクと動く腰はリズミカルに犯し、提督は牝になったかのようにアンアンと声を上げる。

「提督、お前は私の嫁だ♥　はぁ♥　こうやってフタナリオスチンポに強制喘ぎされてるメスぅ♥　私のチンポ虜な亭主関白妻だぁ～♥　ウッグ♥　うギぃ～～♥　はぁはぁ♥　ふぎぃぃ～～♥　変態なオスマンコをきゅっと締めるのも上手になってきたじゃないかぁ♥　おん～ふぅ～ぅ♥　こう向き合って♥　犯し合うのもいいものだな♥　ハァハァ♥」

ぶくりと膨らむフタナリチンポを激しくアナルの肉で包みこむ。繋がった部分から伝わる提督の触感を存分に対応する。肉棒は、我慢汁を絡みつくアナルを精一杯突き上げる。

「フタナリ女のチンポ美味しいだろぉ♥　めったに味わえない美味チンポだぁ～～♥　アナルがひくっひくって前立腺喜んでいるぞぉ♥　おぎひぃッ♥　わひゃしも、私のティンポもぉ♥　おほおぉもっぉおぉ～♥　相性ばっちりって喜んでいるぞぉ～～♥」

舌と舌を絡み合わせると那智の股間のイチモツはさらに大きくなる。キスは舌同士での犯し合いを表現するのに酷似していた。無我夢中に淫液である唾液の交換を続ける。濃厚な淫液は二人を加速させる。

「おぉ♥　もっとキスだぁ♥　んじゅるぅぅ～♥　そうすればな♥　チンポ圧迫が増えるぞぉ♥　我慢汁と腸液とろっとろぉ～オッオ♥　んぅ、もっと♥　キスいっぱいだぁ♥」

いっそう加速し提督の尻を激しく犯す。提督もそれに応えるようにアナルの肉を固く締める。しかし、主導権はフタナリである那智に握られていた。

那智の本能が一斉に上昇し始める。限界まで膨れ上がった本能をアナルの奥へと解放しようとする。

「ぬぎイぃ～イぃひぃッ♥　い、いいか、いいか、射精するぞ♥　あっぁ～～♥　金タマ奥からストイッグゥ射精ぃ～～♥　キュって縮みあがって上に昇ってきたぁ～♥　提督のな、おめこアナルがいけないんだぞ♥　イグゥイクッ♥　イクぅ～♥　ひぃイグゥ～～～♥」

宣言すると、燃え上がるように二人の距離は縮み、陰茎が脈打ち、睾丸の奥から精子を一番奥で解き放った。

ぶりぇりりっるるるう！　びゅりりゅッ～～～～！　びりゅ！　ぶゅびゅ～～～！

「あぎぃぃぃ～～♥　ふあぁぁあぁ～～♥　やばぁ～♥　数週間ぶりぃの沢山ザーメン射精ぃ～～♥　精子がお外出てるぅ～～♥　魅惑の提督妻オスマンコぉすごぉ～♥　すごぉい♥　おおっオ♥　アッブ♥　はぶぅ♥　達成射精感がっ♥　ハッグ♥　賢者来ないぃ～ぃ♥　金タマも竿も精液出し惜しみしてないんだぁ♥　退屈をしないぃ提督ザーメン流し込みぃ♥　酷くエッロくドクンドクンビュッビュしたんだぁ♥」

欲望の放出を貪欲なままに求める。提督は、射精をした疼きを味わい喘ぐ那智をじっとして幸福そうな顔で見るのだった。

「提督よ……チンポ快感まだ味わっていたい♥　エッチ戦略で私専用マンコをオナホみたいにセックスオナニーしていたいぃ……♥」

耳元でささやくとペニスをアナルから引き抜く。甘い響きに欲望の酔いが増すようだった。

その後

「提督、良かったぞ……勝って兜のなんとやらだ♥　この次もお願いするので、更なるアナル開発よろしくなっ♥」

了